

長崎県立高等技術専門校

平成二十二年度 一般入校選考試験問題

国語

※ 答は、解答用紙に記入してください。

| |
|------|
| 受験番号 |
| 番 |

一 次の各設問に答えなさい。

問一 傍線部の漢字の読みを、ひらがなで書きなさい。

- ① 彼には多くの逸話がある
- ② 春になると雪崩による事故が増える
- ③ 転居にあたり惜別の情に堪えない
- ④ 古都の秋を満喫する
- ⑤ 巧妙な手口にだまされる
- ⑥ すばらしい演奏に陶醉する
- ⑦ 赤ちゃんが健やかに育つ
- ⑧ 険しい山道を登り切った
- ⑨ 久しぶりの雨で草木が潤う
- ⑩ 数々の名作を著した作家たち

問二 傍線部のカタカナに当てはまる漢字として最も適切なものをあとから選び、記号で答えなさい。

- ① 期待に胸がフクラむ
(ア 含) イ 膨 ウ 剖 エ 房
- ② 騒音にマギれて話が聞こえない
(ア 粉) イ 惑 ウ 紛 エ 迷
- ③ 経験がトボしい
(ア 鈍) イ 食 ウ 貧 エ 乏
- ④ 落成式にショウタイされた
(ア 昭待) イ 紹待 ウ 招待 エ 奨待
- ⑤ 国力がスイビしつつかあるのは寂しいことだ
(ア 衰微) イ 哀微 ウ 衰微 エ 悴微
- ⑥ ユウシ以来の大事件
(ア 有志) イ 有史 ウ 勇士 エ 雄姿
- ⑦ 校庭を市民にカイホウする
(ア 解放) イ 開封 ウ 解做 エ 開放
- ⑧ アジア諸国をレキホウする
(ア 歴訪) イ 曆訪 ウ 曆法 エ 歴法
- ⑨ 会議はサイゲンなく続いた
(ア 再現) イ 細限 ウ 際限 エ 最限
- ⑩ 社長のユウダンで事業からの撤退を決定した
(ア 有段) イ 勇断 ウ 有断 エ 勇弾

問三 次の各語の反対語として最も適切なものをあとから一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 希薄 ② 起伏 ③ 厳格 ④ 尊大 ⑤ 発端
- ア 平坦 イ 従順 ウ 恥辱 エ 寛容
- オ 結末 カ 卑下 キ 濃厚 ク 存続

問四 次の四字熟語の空欄にあてはまる正しい漢字をあとから選び、記号で答えなさい。

- ① 挙両得 ② 公平 私 ③ 主 転倒
- ④ 不即不 ⑤ 熟 断行
- ア 百 イ 一 ウ 無 エ 離
- オ 慮 カ 識 キ 屈 ク 客

問五 次のことわざとほぼ同じ意味内容を表すことわざをあとから選び、記号で答えなさい。

- ① 浅い川も深く渡れ ② 果報は寝て待て ③ 紺屋の白袴
- ④ 灯台もと暗し ⑤ 猫に小判
- ア 馬の耳に念仏 イ 医者の不養生
- ウ 待てば海路の日和あり エ 下手な考え休むに似たり
- オ 餅は餅屋 カ 一寸の虫にも五分の魂
- キ 念には念を入れよ ク 己のまぶたは見えぬ

問六 次の故事成語の意味として最も適切なものをあとから選び、記号で答えなさい。

- ① 鯖を読む ② 日暮れて道遠し ③ らちが明かない
- ④ 舟に刻みて剣を求む ⑤ 水清ければ魚棲まず

- ア 目上の人などの怒りを買うこと
- イ 年はとったが目標達成まではほど遠いこと
- ウ 時勢の移り変わりを知らず古いしきたりを守ること
- エ 決まりがはつきりつかないこと
- オ 人格が清廉潔白でありすぎるとかえって敬遠され孤立してしまうこと
- カ 自分の都合のいいように数をごまかすこと
- キ つまらぬ人間は暇があるとかくよくないことをするということ
- ク 無駄話はある程度でやめておくのがよいこと
- ケ 多量で数えにくいものでも正確に数えること
- コ 刻限が過ぎること

【二】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（構成の都合で省略した部分がある。）

現代の日本人は若者を中心として、過去のような対人関係を営むことが難しくなってきた。このような風潮は、「関係できない症候群」の蔓延と呼んでも差し支えないだろうと私は考えている。その背景にあるのは、社会の高度情報化、端的にIT化にほかならない。それを象徴化するのがケータイの流布である。

ケータイをいだと、常に身につけていないとどうも A な気分になってくる。「常につながっていないと気が安まらない」という感覚——それは、私たちがコミュニケーションの媒体そのものの共有という事実にもとづいて、集団としての連帯を確認するようになってきたことを示唆している。ともに同じホームページにアクセスしているとか、同じアイドルの情報を共有しているとか、そういうことのみで一体感を味わうのである。実際にホームページに提供されている情報などは、大して意味を持たない。だから、先ほどまで話していた人に、別れるや否や、メールを送ったりする。他方、①メッセージは空虚化する方向へ傾斜する一方となる。

（中略）

以前なら、さしずめ民族とか国家とか会社とかが、統合の象徴的役割をはたしてきた。それが急速に影響力を失いつつある。二〇〇二年六月に日本でサッカーのワールドカップが開催された時には、にわかサッカーファンが急増し、誰もが熱に浮かされたように日本チームを応援したことはまだ記憶に新しい。あのフィーバーぶりを指して、ナシヨナリズムの高揚の危険性を指摘する声も聞かれたが、実は決してそのような熱狂ではなかった。

ルールなど理解せずとも、同じチームを応援するための熱狂、同じユニフォームをサポートも着て、声を合わせることにのみ意義があつたにすぎない。それゆえ夏がやってくると、ひと月前の感激はあとかたもなく消え去ってしまった。

おそらく、今日のような②媒体自体に依存したコミュニケーションが流布しだした端緒は、テレビの普及にあるのだろう。幼少時からビジュアル系のマスメディアにどっぷりと浸って成長した年齢層とは、まさにポスト全共闘世代にはじまる。ひるがえって考えるに、それは学生運動が急速に停滞し、政治への無関心が議論されだした時期であった。

B 事態を決定づけたのが、一九九〇年代後半からの「IT革命」なるメディア変化である。ITは、コミュニケーションに加わる者の要件である③空間的近接性と時間的永続性を決定的につきくずしてしまった。人々は「どこからでも」「いつでも」という利便性に魅惑される。魅惑されるあまり、ITメディアの魔法の支配から自由になった状況でのつき合いを忘れてしまった。メル友と交信する若者は、対面場面では伝えにくいことでも、メールなら可能と言い、顔を合わせて会話する方がかえって疲れてつらいとこぼす。C、人間ひとりひとりの存在は、いつまでたつても時間と空間の拘束を免れることはない。

しかもすでにふれたように、個々人は公的世界へ出て他者との交渉のなかではじめて自己実現を遂げるのである以上、空間上の近接性と時間上の持続性を欠いたコミュニケーションというものには、おのずと限界が生じてくるのである。その問題がもっとも先鋭的な形で浮上してくるのが、「相手とどのようにして D 関係を結んだらいいのか」という「疑念」なのだと言えよう。どこにいるのか確かでない相手との、瞬間瞬間の交渉のなかで、いかにして信じ合えばよいのか、見きわめる術を見出せないでいる。

（正高信男『ケータイを持ったサル』）

問一 空欄 A に入れるのに最も適切なものをあとから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 不快 イ 不吉 ウ 不安 エ 不毛

問二 空欄 B・C に入れるのに最も適切なものをあとから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア おそらく イ そして ウ したがって
エ しかし オ あるいは カ すなわち

問三 傍線部①「メッセージは空虚化する」とはどいう意味か。最も適切なものをあとから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア メッセージはほとんど意味のないものとなる
イ メッセージは相手の心をむなしくするものとなる
ウ メッセージは事実と異なるものとなる
エ メッセージはゆがんだ内容を持つものとなる

問四 サッカーのワールドカップにおける応援の熱狂は何を述べるために挿入されたのか。その説明として最も適切なものをあとから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人としての一体感・連帯感スポーツの場であれば深くなること
イ 日本人の国民や民族としての一体感・連帯感が表面的なものとなっていること
ウ 日本人が本質的でないことに情熱を燃やす軽率な民族になりつつあること
エ 日本人の一体感や団結力は世界を相手にする時に発揮されること

問五 傍線部②「媒体自体に依存したコミュニケーション」と同じ意味・内容を指しているものを、あとから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 媒体そのものの共有という事実にもとづいて、集団としての連帯を確認するコミュニケーション
イ ITメディアの魔法の支配から自由になった状況でのつき合い
ウ 公的世界へ出て他者との交渉のなかではじめて自己実現を遂げるコミュニケーション
エ どこにいるのか確かでない相手との、瞬間瞬間の交渉

問六 傍線部③「空間的近接性と時間的永続性」とはどういう意味か。その説明として最も適切なものをあとから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 対話をいくたびも重ね、時間を充実させること
- イ 時間をかけて対話し、距離感をなくすこと
- ウ 面と向かって対話し、時間をかけること
- エ 空間も時間ともに超越して、自由になること

問七 空欄 D に入れるのに最も適切な語をあとから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 依存
- イ 信頼
- ウ 交友
- エ 利害

【三】次の文章は、明治時代の文豪・幸田露伴の娘、幸田文あやによる文章である。よく読んで、あとの問いに答えなさい。

いつの頃からか、私は朱竹しゅちく坨の鴨の話聞いていた。朱竹坨というえらい先生が、わかいたとき夢を見た。池にはいっぱい鴨がいる。池の番人は、これはあなたが一生のあいだにたべる鴨だと云った。その夢から何十年のち、老いて病んでいる朱竹坨先生は、また鴨の夢を見た。鴨は二羽しかいなくなっていた。竹坨は死期の近いのを知った。そこへ娘が老父を慰めようと、鴨を料りょうつて見舞に来た。父は A、という話である。

私の子どもの時分には、歳暮に方々から鴨の籠が贈られて来た。青い芹せりを蒲団に敷いて、黄いろい柚ゆずの実を枕にしたようなかたちで、青竹の籠に寝ている鴨は、あたたかさうであった。もの心おぼえて以来、私のうちの雑煮は鴨雑煮だった。水鳥の膏わたくと餅との調和は、しつこいうまさをもっていたから、たまによそのうちの雑煮をたべると、妙にあっけなく感じた。贈答の品にもはやりすたりがあると見えて、そのうち鴨はずがたを見せなくなったが、私はわざわざ買いととのえても鴨の雑煮をつづけた。

朱竹坨の話はおもしろいけれど私は B だった。台処を預かるものがこんな話を聞かされては、なにも煮ることはできなくなってしまふ。二十二年正月用の鴨を私はなじみの鳥屋に予約した。そうはしたものの、八十歳の病老父をかかえていた私は終始その死をおそれていたので、そのときも胸中朱竹坨の影と闘ったのであった。ところが鳥屋の主人は歳末のせわしさにのぼせて、雇い人のはしばしまで命令がとどきかねたと見えて、大晦日おおみそかにうけとりに出向いたときには、すでに予約の鴨はずがたが無かった。鳥屋の主人は父の名を聞き知っていたので、おとしよりに申しわけないと、鳥屋なかまへ小僧を走らせよう、細君ほこには心当たりへ電話をかけさせよう、と心をつかった。なにも知らない主人の①狼狽ろうたいを見て、②私はからりと明るい気もちになつてしまった。自然に福はさきへ延びたのだ、と思わずにはいられなかった。主人の好意を辞退して、鴨の代りにかしわを買って帰った。

が、私はばかだった。③時すでに鴨の尽きたのを、こうもはつきり見せられていたのに気がつかなかつたとは。しみじみ自分の勝手に解釈したがるものだとおもう。今年は雑煮の無い喪の正月を迎えた。

来年は丑だという。

天鳴れど地震なふれど牛の歩みかな

父の句である。私にいちばん欠けているのは牛歩的なものである。文豪といわれた人の第二世の道は楽ではない。親爺さまの遺したのも相当に持ちおもりがする。そこへ天が鳴ったり地が震えたりしては、よっぽど大変だ。印税成金の牛乳風呂も夢には結構だが、私はやっぱり④瘦牛やせう相当に車を曳ひつぱって歩く稽古をして行きたくおもう。

（幸田文『ちぎれ雲』の中の「鴨」）

（注）*一 二十二年＝昭和二十二年のこと

*二 細君ほこ①自分の妻の謙称。②他人の妻。ここでは②。

問一 空欄 A に入れるのに最も適切な語句をあとから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア まもなく病気が重くなった
- イ さつそく喜んで食べた
- ウ やがて世を去った
- エ たちまち不機嫌になった

問二 空欄 B に入れるのに最も適切な語句をあとから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 好き
- イ 嫌い
- ウ 関心のあること
- エ 関心のないこと

問三 傍線部①「狼狽」の意味として正しいものをあとから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア あわてふためくこと
- イ 落ち着き機転を利かせること
- ウ 驚き気の毒がること
- エ 恥じ入りうろたえること

問四 傍線部②「私はからりと明るい気持ちになってしまった」のはなぜか。その理由として最も適切なものをあとから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 鳥屋の主人の好意がうれしかったから
- イ 鳥屋の主人の反応がおもしろかったから
- ウ 父と鳥屋の主人の仲の良さが忍ばれたから
- エ 父の死がしばらく先に延びたと思ったから

問五 傍線部③について「時すでに鴨」が「尽きた」というのはどの時点のことを指しているか。最も適切なものをあとから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 贈答品に鴨が姿を見せなくなった時点
- イ 胸中朱竹垞の影と必死に闘った時点
- ウ 大晦日に予約の鴨がなかった時点
- エ 鴨雑煮のない正月を迎えた時点

問六 傍線部④「瘦牛相当に車を曳っぱって歩く」とはどう生きることか。最も適切なものをあとから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 不器用でのろくても、堅実に生きること
- イ とりえがなくて愚かでも、自分に正直に生きること
- ウ 女でひ弱でも、自信を持って生きること
- エ 知恵もなくお金がなくても、心豊かに生きること

問七 この文章の特徴を説明したものと最も適切なものをあとから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 父との思い出が、鋭い感性で叙情豊かに描かれている
- イ 父への情愛が、淡々として歯切れのよい文章で描かれている
- ウ 生の終わりに近い父の様子が、冷静な目と観察力で描かれている
- エ 父への負けじ魂が、男性的な力強い文章で描かれている